

Chevy Chase の二つの版について

筏 津 成 一

(昭和57年5月31日受理)

序

Chevy Chase の名で広く知られる *The Hunting of the Cheviot* (Child, 162)⁽¹⁾ はスコットランド国境地方に於ける, Percy, Douglas 両豪族の戦いを扱った, 所謂, 歴史的バラッド⁽²⁾ である。この *Chevy Chase* が有名になったのは, バラッドとして傑出しているばかりでなく, Sidney, Addison といった文人達によって称讃されたという事実に負う所が大きい。

ところで, この *Chevy Chase* には伝承版の **A** バージョン (以下 **A** と略記) とブロードサイド版の **B** バージョン (以下 **B** と略記) の二つの版がある。これまで繰り返し引用されてきた Sidney の「Percy と Douglas の古謡を聞けば, ラッパの音を聞くよりも心が躍る」という有名な言葉⁽³⁾ がどのバラッドについて言われたものか定かではないが, 長い間, **A** であろうと言われてきた。また Ben Jonson が「自分の全作品の作者であるより *Chevy Chase* の作者でありたかった」と述べたのもこの版についてであろうと言われている⁽⁴⁾。17世紀以後, 最も良く知られていたのは **B** である。Addison が、『スペクテイター』誌上 (1711年, 第70号, 第74号) で絶讃したのはこの **B** についてである⁽⁵⁾。

1765年, Thomas Percy は, この **A**, **B** 二つの版を *Reliques of Ancient English Poetry* (『英国古謡拾遺』) に収録して次のようにコメントしている。

At the beginning of this volume we gave the old original Song of *Chevy Chase*. The reader has here the more improved edition of that fine heroic ballad. It will afford an agreeable entertainment to the curious to compare them together, and to see how far the latter bard has excelled his predecessor, and where he has fallen short of him.⁽⁶⁾

ここで Percy は **B** について “the more improved edition” と好意的な見方をしているけれど, 一般には, 伝承バラッドと比較して, ブロードサイドバラッドは陳腐で冗漫な表現が多く, リズムや

脚韻が不自然で、全体に情趣に欠けるといった特徴があり、*Chevy Chase* の **B** はその典型的な例であると考えられてきた。

B is a striking but by no means a solitary example of the impairment which an old ballad would suffer when written over for the broadsides press.⁽⁷⁾

しかしながら、これまでこういった見解は必ずしも具体的な言語事実に基づいて十分に説明されて来たとは言えない。そこでこの小論に於いては *Chevy Chase* の伝承版がブロードサイド版へ書き換えられる過程で、言語、文体にどのような変化が生じたかを、バラッドというジャンルの特異性を踏まえながら考察してみたい。

I

Chevy Chase について検討する前に、バラッドの語りの技巧 (narrative technique) と言語、文体との関係について簡単に触れておきたい。M. J. C. Hodgart が指摘しているように⁽⁸⁾ バラッドと他の種類の詩を区別するのはその独特の語り口である。即ち、バラッドはある一つの重要な「事件」、或いは「場面」を「劇的」(dramatic) に語ろうとする。従って、物語は前置き無しに唐突に始まり、その核心に至るまでの細々した事件や状況に関する記述は極力避けられることになる。又、劇的であろうとして「対話」(dialogue) によって物語が進展していく場合も多い。登場人物に関しても、その行動こそが重要であって、性格付けや心理的動機付けは最小限度に留められる。従って、バラッドの文体について論じる場合には、上のような特有の語り口に適したものであるかどうか重要な判断の基準になってくる。

因みに、ここで *Chevy Chase* のストーリーの展開について見ておこう。*Chevy Chase* はバラッドとしては比較的長く、一見、叙事詩のような印象を与えるけれど、G. H. Gerould が

There is nothing epic in the manner of this stirring tale. Instead, it has the true ballad movement in swift and flashing scenes, each held only long enough to make the action clear, each connected only by the sequence of event with what precedes and follows it.

と述べているように⁽⁹⁾ 前述のバラッド特有の語り口を持っており、そのストーリーは次のような場面の連続から成り立っている。

- (1) Percy が Douglas の許可を得ないで Cheviot の狩り場で鹿狩りをすると宣言する。(第1連—第2連)⁽¹⁰⁾
- (2) Percy が Banborowe からやって来て鹿狩りをする。(第3連—第8連)
- (3) 突然 Percy は、Douglas がここで自分の狩りを阻止すると約束していたと叫び、直ぐにスコットランド軍が場面に登場して来る。(第9連—第14連)
- (4) 両軍の将が対面して、一対一の決闘に同意するが、Northumberland の従騎士がそれを止める。(第15連—第23連)
- (5) 両軍の間で戦闘が始まる。(第25連—第30連)
- (6) Percy と Douglas が対決するが、流れ矢が Douglas の胸を射抜く。Percy は Douglas の死を悼む。(第31連—第39連)
- (7) Hugh of Montgomery は Percy を倒して主人の仇を取るが、自分も矢に当って死ぬ。(第40連—第46連)
- (8) 戦いは激烈を極め夜に入る。多数の死者への挽歌。(第47連—第56連)
- (9) 死闘の一夜が明けると棺に収められた夫達を多くの寡婦達が泣く泣く運び去る。(第57連—第58連)
- (10) 戦いの結果がエディンバラとロンドンへ伝えられ、イングランド王 Henry は報復を誓う。(第59連—第64連)
- (11) エピローグ。(第65連—第68連)

このようなバラッド特有のストーリーの展開を支えているのがバラッドの言語、文体であるが、それは「物語」を韻文形式によって「口誦する」という口承文学独特のメカニズムから生まれたものであり、民衆の素朴な言語を土台として、語彙は限定され、syntax は単純で、表現は常套化し、全体として詩的連想に乏しいと言わなければならない。しかしながら、バラッドにとってその第一義的目標は、「ストーリーを語る」ことであり、そのような観点からバラッドの言語、文体を眺める時、Hodgart が

The ballads are sternly economical in their vocabulary. They use the Homeric epithet for much the same reason as Homer is said to have used it: to avoid distraction from the story-telling. The listeners can rest on the familiar and repeated epithets and so concentrate the better on the working-out of the plot.

と述べているように、⁽¹¹⁾ 貧弱な ‘poetic texture’ であることが、むしろ物語としてのバラッドに

相応しいという逆接を生むことになる。

以下、**A**、**B**二つの版の *diction*, *syntax* 等の違いを比較することによって、それらがどのような文体的効果をもたらしているかについて具体的に分析してみよう。

II

先に述べたように、バラッドの言語に於いて重要なことは、それが抵抗なく聴衆に受け入れられることで、必ずしも詩として秀れている必要はなかった。事実、多くのバラッドは限られた数の常套形容辞 (*stock epithet*), 或いは常套句 (*commonplace*)⁽¹²⁾ を共有し、全体として表現は画一化している。従って、個々のバラッドの文体は没个性的であると言える。しかし *Chevy Chase* の **A** については少し事情が異なってくる。それは **A** が1600年以前の写本の中に見い出される数少いバラッドの一つであり、⁽¹³⁾ 中世からの伝統的な頭韻詩の語彙を含んでいる点である。そしてこれらの詩語は、ただ単に韻律を整えているだけでなく、平凡な詩行の中に於いて一際異彩を放っており、写本の英語の不規則さ (語彙, 綴字など) と相俟って、⁽¹⁴⁾ バラッド全体が古色蒼然とした様相を呈している。これに対して **B** では、このような詩語は大衆向けの平凡な常套語句へと書き換えられている。

5. The dryvars thorowe the woodes went

For to reas the dear;

Bomen byckarte vppone the bent

With ther browd aros cleare.

7. The gallant greyhound [s] swiftly ran

To chase the fallow deere;

On Munday they began to hunt,

Ere daylight did appeare.

6. Then the wyld thorowe the woodes went

On euery syde shear;

Greahondes thorowe the grevis glent

For to kyll thear dear.

(以下、このように連 (*stanza*) を並置した場合、左側が **A**、右側が **B** であり、⁽¹⁵⁾ 各連の左肩の数字は、それぞれの版に於ける連番号を示している。)

A の第5連に於いて、“*Bomen*,” “*byckarte*,” “*bend*” が押韻している。‘*bicker*’ は ‘*assail with missiles*’ の意味であるが、*Oxford English Dictionary* (以下、*OED* と略記) の最終例は1550年で、この写本が書かれた時期とほぼ同じであり、⁽¹⁶⁾ 当時既にこの語が一般的でなくなりつつあったと考えることができる。従って、**A** の発掘者となった Thomas Pery にとっても古風 (*archaic*)

な語として映ったはずである。第6連では三行に渡って頭韻が見られる。“wyld,” “woodes,” “went” と “syde,” “shear,” と “Greahondes,” “grevis,” “glent” である。この中で ‘shear’ は次の第8連にも見られるが、‘several’ の意味で *OED* の唯一例になっている。‘glent’ (=dart) も15世紀を中心に使用された語である。⁽¹⁷⁾ **B** に於いては、“gallant” と “greyhound[s]” が押韻しているが、“glent” は消えて “swifty ran” に変わっている。この ‘gallant,’ ‘swifty’ はいずれもバラッドの常套語である。

8. The [y] blewe a mo[r]-t vppone the bent,
The [y] semblyde on sydis shear;
To the quyrry then the Perse went
To se the bryttlynge off the deare.

11. Lord Percy to the query went
To view the tender deere;
Quoth he, “Erle Douglas promised once
This day to meete me here;

“sydis shear” については前で述べた。**A** の “bryttlynge” と **B** の “tender deere” が対応するが、‘brittling’ (=cutting up of a deer) は *OED* の唯一例であり、**B** と比較して、**A** の方が独自の語の使用をしていることが解る。

14. The dougheti Dogglas on a stede
He rode alle his men beforene;
His armor glytteryde as dyd a glede;
A boldar barne was neuer born.

17. Erle Douglas on his milk-white steede,
Most like a baron bold,
Rode formost of his company,
Whose armor shone like gold.

ここでは **B** に於いて慣用表現が多用されているのが目立っている。“milk-white” はバラッド特有の Homeric epithet⁽¹⁸⁾ であり、“like a baron bold,” “shone like gold” も常套比喩 (stock comparison) である。これに対して **A** は、“glytteryde as dyd a glede” という頭韻による直喩になっている。‘gleed’ (=coal) はしばしば ‘glow,’ ‘glister,’ ‘glitter’ 等と一緒に直喩として用いられるが⁽¹⁹⁾ /gl/ の音による頭韻は「燃え盛る炎」のイメージを彷彿とさせて、単なる装飾⁽²⁰⁾ に留まっていない。この用法の最終例は1650年頃で、archaic な詩語とすることができよう。

26. Yet byddys the yerle Doglas vppon the bent,
A captayne good yenoughe,
And that was sene verament
For he wrought hom both woo and wouche.

27. The Dogglas partyd his ost in thre
 Lyk a cheffe cheften off pryde;
 With suar spears off myghtte tre
 The[y] cum in on euery syde;
28. Thrughe our Yngglyshe archery
 Gave many a wounde fulle wyde;
 Many a doughete the[y] garde to dy,
 Which ganyde them no pryde.
29. The Ynglyshe men let thear bo[w]ys be
 And pulde owt brandes that wer brighte;
 It was a hevy syght to se
 Bryght swordes on basnites lyghte.
30. Thorowe ryche male and myneyeple
 Many sterne the[y] strocke done streght;
 Many a freyke that was fulle fre
 Ther vndar foot dyd lyght.

これはAの第26連から第30連までの戦闘の場面であるが、Bにはこれに対応する連はない。第26連に於いて“wrought,” “woo,” “wouche”が押韻している。‘wouch’ (=harm, injury)は‘do’或いは‘work’と一緒に慣用句として用いられるが、この個所がその最終例になっており、⁽²¹⁾ 当時としてもかなり古風な表現であったと思われる。また第27連以下にも、“cheften” (=military leader), “garde” (gar=make or cause), “myneyeple” (不詳), “sterne” (=warrior), “freyke” (freke=man)等の古語が見られる。‘stern’は主に頭韻詩に於いて用いられ、最終例は1470年、また‘freke’も同じような意味の詩語で、‘man’の単なる同義語として使われていた。⁽²²⁾

31. At last the Duglas and the Perse met
 Lyk to captayns of myght and of mayne;
 The[y] swapte togethar tyll the[y] both swat
 With swordes that wear of fyn myllan.

31. At last these two stout erles did meet,
 Like captaines of great might;
 Like lyons woode they layd on lode;
 The[y] made a cruell fight.

32. Thes worthe freckys for to fyght
 Ther-to the[y] wear fulle fayne,
 Tylle the bloode owte off thear basnetes
 sprete
 As euer dyd heal or ra[y]n.

32. The[y] fought vntill they both did sweat,
 With swords of tempered steele,
 Till blood downe their cheekes like raine
 The trickling downe did feele.

A, **B** を比較して見ると, **A** に於いて “swat,” “swordes” と押韻している “swapte” (swap = smite) が **B** では “fought” に, また “myllan” (=Milan steel) が “steel” へと, より一般的な語に変わっている。また, **A** の第32連の “sprete” は「(血が) 噴出する」の意味では1470年の例が最後で,²³⁾ この個所も同様に古語法と見做すことができる。

40. Off all that se a Skottishe knyght
 Was callyd Ser Hewe the Mon[t] gombyrry;
 He sawe the Duglas to the deth was dyght,
 He spendyd a spear, a trusti tre.

40. A knight amongst the Scotts there was
 Which saw Erle Douglas dye,
 Who streight in hart did vow revenge
 Vpon the Lord Pearcy.

41. He rod vppone a corsiare
 Throughe a hondrith archery;
 He neuer stynttyde, nar neuer blane,
 Tylle he cam to the good lord Perse.

41. Sir Hugh Mountgomerye was he called,
 Who, with a spere full brihgt,
 Well mounted on a gallant steed,
 Ran feirely through the fight,

A の第40連の “spendyd” (spend = gras) は “spear” と押韻しているが, *OED* の二例の内の一つになっている。**A** の第41連の “corsiare” (courser = a large powerful horse ridden in battle) が **B** では “gallant steed” という常套表現になっている。

68. Ihesue Crist our balys bete
 And to the blys vs brynge;
 Thus was the hountynge of the Chivyat;
 God send vs alle good endyng!

A の最終連には二行に渡って “balys,” “bete,” “blys,” “bringe” という頭韻が見られる。‘bete’ (=relieve) は ‘to bete one’s bale’ という成句で使われるが, 1513年が最終例になっており,²⁴⁾ これも古い詩語に属する。

以上、**A**を中心に語彙について見てきたのであるが、その結果、まず**A**に於いては1600年以前を中心に使用された語がかなり含まれていること、その中には *Chevy Chase* のオリジナルな語もいくつかあること、またそのような古い語は伝統的な頭韻詩が共有する詩語であること等が明らかになった。従って、この**A**の作者であるバラッド詩人は、伝統的な頭韻詩に通じており、尚かつ枠に囚われない自由な言語感覚を持っていたのではないかと想像される。これに対して**B**は、ストーリーの展開、連の構成等に関しては**A**を忠実に踏襲しているが、**A**に於いて見られたような詩語については悉くこれを捨て去ってしまっ、ブロードサイドバラッド特有の ‘*cliché*’ ばかりが目立つ結果になっている。

III

A、**B**両版の間には、語彙と同様、*syntax* に於いてもかなり顕著な相違が認められ、それが両版の文体の違いとなって現れている。この点について、ストーリーの展開と関連させながら見ていこう。

- | | |
|---|--|
| <p>1. The Perse owt off Northombarlonde,
And avowe to God mayd he
That he wold hunte in the mowntayns
Off Chyviat within days thre,
In the magg[re] of doughte Dogl[a]s,
And all that euer with him be.</p> | <p>3. The stout Erle of Northumberland
A vow to God did make
His pleasure in the Scottish woods
Three sommers days to take,</p> |
| <p>2. The fattiste hartes all Cheviat
He sayd he wold kyll, and cary them away:
Be my feth, sayd the dougheti Douglas agayn,
I wyll let that hontyng yf that I may.</p> | <p>4. The cheefest harts in Cheuy C[h]ase
To kill and beare away:
These tydings to Erle Douglas came
In Scotland where he lay.</p> |
| | <p>5. Who sent Erle Percy present word
He wold prevent his sport;
The English erle, not fearing that,
Did to the woods resort,</p> |

Percy が Douglas の許可を得ないで、Cheviot の狩り場で三日間鹿狩りをすると宣言する。そして Douglas もこれを必ず阻止することを誓う。**A**に於いては、Percy の挑戦に対する Douglas の反応は、間髪を入れずに、“Be my feth, I wyll let that hontyng yf that I may” というスピーチの形で描かれている。これに対して**B**では “These tydings to Erle Douglas came/In Scotland

where he lay/Who sent Erle Percy present word/He wold prevent his sport” のように、“where,” “who” という関係詞の使用によって文が延長されており、**A** のスピーチと比較した場合、このナレーションは明らかに冗漫で散文的である。

ところで**B**に於いて、関係代名詞“who”が前の連の先行詞を受けているのは不自然と言わなければならない。なぜなら、バラッドの連は、内容的にも、構文的にもその中で完結しているべきで、連を越えて延びていく、一種の「句またがり」(enjambment) のような syntax はバラッド本来のものではないからである。従ってここで考えられることは、本来、内容的にみて第4連後半二行と第5連前半二行が二行連句(couplet)として一つの連を構成すべきであるが、⁽²⁵⁾それが果し得なかった為に、ブロードサイド詩人は、両者を密接に結びつけようとして、散文的な関係詞の継続的用法という手段を取ったのではないかということである。**B**にはこのような例があちこちに散見される。

- | | |
|--|---|
| <p>3. The[n] the Perse owt off Banborowe cam,
 With him a myghtee meany,
 With fifteen hondrith archares bold off blood
 and bone;
 The[y] wear chosen owt of shyars thre.</p> | <p>5. Who sent Erle Percy present word
 He wold prevent his sport;
 The English erle, not fearing that,
 Did to the woods resort,</p> |
| <p>6. With fifteen hundred bowmen bold,
 All chosen men of might,
 Who knew ffull well in time of neede
 To ayme their shafts arright.</p> | |

Percy は1500名の弓を持った勇敢な兵士を従えて狩り場へとやって来る。**A**の第3連は**B**の第5連の後半二行と第6連に対応しているが、第6連は付帯状況であって、第5連後半二行と第6連は一つの連を構成しているべきである。この**B**の文の構造は、分詞構文(“not fearing that”), 同格句(“All chosen men of might”), 更に関係詞節(“Who know ffull well in time of neede/To ayme their shafts arright”)によって徒に引き延ばされており、**A**の第3連のような単純なりズミカルなバラッド特有の syntax とは大凡懸け離れていると言わざるを得ない。

- | | |
|---|---|
| <p>8. The[y] blewe a mo[r]t vppone the bent,
 The[y] semblyde on sydis shear;
 To the quyrry then the Perse went
 To se the bryttlynge off the deare.</p> | <p>11. Lord Percy to the query went
 To view the tender deere;
 Quoth he, “Erle Douglas promised once
 This day to meete me here;</p> |
|---|---|

9. He sayd, It was the Duglas promys
 This day to met me hear;
 But I wyste he wolde faylle, verament;
 A great oth the Perse swear.
12. "But if I thought he wold not come,
 Noe longer wold I stay."
 With that a braue younge gentلمان
 Thus to the erle did say:

殺された鹿の処理を見にやって来た Percy は、Douglas がこの鹿狩りを阻止するという約束を破ったと言って罵る。これはAに於いては第9連に Percy のスピーチとして描かれているが、Bに於いてはこのスピーチが第11連と第12連に分離してしまっている。これも本来は同一連内に描かれるべきであろう。又、第12連後半二行の "With that a braue young gentلمان / Thus to the erle did say" は前の Percy のスピーチと第13連のスピーチの間にあつて、二つを繋ぐ補足説明的なナレーションとなっているが、これは「対話」による劇的な展開を妨げるものである。

22. Then bespayke a squyar off
 Northombarlonde,
 Richard Wytharyngton was his nam:
 It shall neuer be told in
 Sothe-Ynglonde, he says,
 To Kyng Herry the Fourth for sham.
24. Then stept a gallant squire forth—
 Witherington was his name—
 Who said, "I wold not haue it told
 To Henery our king, for shame,
23. I wat youe byn great lordes twaw,
 I am a poor squyar of lande;
 I wylle neuer se my captayne fyght
 on a fylde
 And stande my selffe and loocke on,
 But whylle I may my weppone welde
 I wylle not [fayle], both hart and hande.
25. "That ere my captaine fought on foote,
 And I stand looking on.
 You bee two Erles," quoth Witherington,
 "And I a squier alone;
26. "I'le doe the best that doe I may,
 While I haue power to stand;
 While I haue power to weeld my sword,
 I'le fight with hart and hand."

Percy と Douglas が一対一の決闘を始めようとした時、一人の従騎士が主人が戦うのを家来が黙って見ている訳にはいかないと一言で一緒に戦おうとする。Bの第24連の "it" は形式目的語で次の連の "That ere my captain fought on foot / And I stand looking on" がその内容である。こういった連の性格を無視した不自然な syntax は 'oral making' に於いては起り得ないことで、ブロードサイド詩人の「詩人」としての資質もさることながら、創作方法の違いがここに投影されていると考えたい。

さて、今度は別の角度から検討してみよう。

5. The dryvars thorowe the woodes went
 For to reas the dear;
 Bomen byckarte vppone the bent
 With ther browd aros cleare;

7. The gallant greyhound[s] swiftly ran
 To chase the fallow deere;
 On Munday they began to hunt,
 Ere daylight did appeare.

6. Then the wyld thorowe the woodes went
 On euery syde shear;
 Greahondes thorowe the grevis glent
 For to kyll thear dear.

これは獵犬を使つての鹿狩りの場面であるが、一見して明らかなのは、**A**が第5連、第6連の二つの連を費して狩りの様子を描いているのに対して、**B**は第7連のみである。**A**に於ては、「追手」、「射手」、「鹿」そして「獵犬」を其れ々れ主語とする四つの文が並置され、所謂、並位構文 (parataxis) を成している。しかも、そのうちの三つの文が“The dryvas thorowe the woodes went”と同じセンテンスパターンであり、頭韻の効果的な響きと相俟って、快いリズムとスピード感のある文体になっている。これに対して**B**では特別の表現上の工夫は認められず、**A**の方が「狩獵」の場面の生々としたアクションを再現していることは明らかである。

14. The dougheti Dogglas on a stede
 He rode alle his men beforné;
 His armor glytteryde as dyd a glede;
 A boldar barne was neuer born.

17. Erle Douglas on his milk-white steede,
 Most like a baron bold,
 Rode formost of his company,
 Whose armor shone like gold.

15. Tell me whos men ye ar, he says,
 Or whos men that ye be;
 Who gave youe leave to hunte in this
 Chyviat chays
 In the spyt of myn and of me?

18. “Shew me,” sayd hee, “whose men you bee
 That hunt so boldly heere,
 That without my consent doe chase
 And kill my fallow deere.”

16. The first mane that euer him an answeare
 mayd,
 Yt was the good lord Perse:

19. The first man that did answer make
 Was noble Pearcy hee,
 Who sayd, “Wee list not to declare
 Nor shew whose men wee bee;

We wyll not tell the whoys men we ar,
 he says,
 Nor whos men that we be;
 But we wyll hounte hear in this chays
 In the spyt of thyne and of the.

兵士を従えて登場してきた Douglas と Percy との間で言葉の遣り取りが行われる。Aに於いて、Douglas のスピーチは “Whos men ye ar,” “Whos men that ye be,” “Who gave you leave to hunte in this Chyviat chays / In the spyt of myn and of me” のように疑問詞が繰り返され、所謂、首句反復 (anapnora) になっている。そしてこの並位構文は緊迫した、畳みかけるような調子のリズムを生み出している。これに対する Percy の返事は、バラッドのコンベンションに従って問いかけと全くパラレルな構文になっているが、⁽²⁶⁾ その構文の類似性が却って、この二つの連を鮮かに対比させる結果になっている。これに対してBは、第18連に於いて “Whose men you bee / That hunt so boldly heere / That without my consent doe chase / And kill my fallow deere” のように二つの関係詞節によって syntax が冗長になり、Aのようなリズム感は失われている。また第18連の「問い」と第19連の「答え」も、構文的にパラレルになっていない。

今みてきたような並位構文は伝承バラッドに於いてよく見られるもので、中には commonplace として定着しているものもある。

‘Go saddle to me the black, the black,
 Go saddle to me the brown,
 Go saddle to me the swiftest steed
 That ever rode from a town.’

この表現効果について Gerould が “Whenever this is used, we get the sense of haste and speed” と述べているように、⁽²⁷⁾ この paratactic な構文によって醸し出される「緊迫感」はいつまでも褪せることなく、多くのバラッドがこれを共有するという結果になっている。

最後にA、B両版の関係詞の用法について考えてみたい。既に、途中でも触れたように、Bに於いては、連を隔てた先行詞を受けるといった用法も見られた。そういった関係詞の用法が何を意味しているか、A、Bを比較しながら考えてみたい。

35. Nay, sayd the lord Perse,
I tolde it the beforne,
That I wolde neuer yeldyde be
To no man of a woman born.
36. With that ther cam an arrowe hastily
Forthe off a myghtte wane;
Hit hathe strekene the yerle Duglas
In at the brest-bane.
37. Thorowe lyvar and longes bathe
The sharpe arrowe ys gane,
That neuer after in all his lyffe-days
He spayke mo wordes but ane:
That was, Fyghte ye, my myrry men,
whyllys ye may,
For my lyff-days ben gan.
38. The Perse leanyde on his brande
And sawe the Duglas de;
He tooke the dede mane by the hande
And sayd, Wo ys me for the!
39. To haue savyde thy lyffe, I wolde haue
partyde with
My landes for years thre;
For a better man of hart nare of hande
Was nat in all the north contre.
40. Off all that se a Skottishe knyght
Was callyd Ser Hewe the Mon[t]gombyrry;
He sawe the Duglas to the deth was dyght,
He spendyd a spear, a trusti tre.
41. He rod vppone a corsiare
Throughe a hondrith archery;
35. "Noe, Douglas!" quoth Erle Percy then,
"Thy profer I doe scorne;
I will not yeelde to any Scott
That euer yett was borne!"
36. With that there came an arrow keene,
Out of an English bow,
Which stroke Erle Douglas on the brest
A deepe and deadlye blow.
37. Who neuer sayd more words than these:
"Fight on, my merry men all!,
For why, my life is att [an] end,
Lord Pearcy sees my fall!"
38. Then leauing liffe, Erle Pearcy tooke
The dead man by the hand;
Who said, "Erle Dowglas, for thy life,
Wold I had lost my hand;
39. "O Christ! my verry hart doth bleed
For sorrow for thy sake,
For sure, a more redoubted knight
Mischance could neuer take."
40. A knight amongst the Scotts there was
Which saw Erle Douglas dye,
Who streight in hart did vow revenge
Vpon the Lord Pearcy.
41. Sir Hugh Mountgomerye was he called,
Who, with a spere full bright,

He neuer stynttyde, nar neuer blane,
Tylle he cam to the good lord Perse.

Well mounted on a gallant steed,
Ran feircly through the fight,

Bに於いては、第35連 (that), 第36連 (which), 第37連 (who), 第38連 (who), 第40連 (which, who), 第41連 (who) に計7回用いられている。このうち、制限的に用いられているのは第35連 (that) と第40連 (which) の2回だけである。これに対してAでは第40連に“that”が一回使われているだけである。即ち、Aに於いては、二行連句の一行毎に文が完結する傾向があるのに対して、Bでは関係詞を使用することによって次の行、或いは次の連へと継続して行く傾向がある。これは、ブロードサイド詩人が二行連句という詩形に熟練していなくて、詩行が散文的になっている為だと

表 1

版	A	B
連の総数	68	64
(関係代名詞)		
who	0	8
whose	0	3
whom	0	1
which	1	2
that	18	10
(関係副詞)		
where	2	3
合計	21	27

考えられる。因みにA、B両版に使用されている関係詞を調べてみると左の表1のような結果になる。これによれば、使用数に於いてBの方がやや多く、Bが‘who’ (whose, whom を含む) と‘that’に平均化しているのに対して、Aは‘that’に集中している。つまりAに於ける関係詞の用法のパターンは‘that’による制限的用法であることが解る。従ってBのように関係詞の使用によって冗漫で張りのない詩行に陥るといふことも少なかったのである。

結 び

Chevy Chase の二つの版に対する従来の評価は、本論冒頭の Child 教授の言葉を始めとして、Wheatley の

The old version is so far superior to the modern one that it must ever be a source of regret that Addison, who elegantly analyzed the modern version, did not know of the original.

という意見や⁽²⁸⁾ 或いは “the degenerate doggerel of a seventeenth-century broadside”⁽²⁹⁾ とか “a broadside vulgarization of the A text”⁽³⁰⁾ といった言葉で代表されるように B に対して批判的なものが多かった。事実、本論で考察してきたように、言語、文体に於いても、A、B の差はかなりはっきりと表れている。ただし、ここで敢えて B を弁護するならば、こういった従来の評価の根底には、常に文学的な審美観があったということである。なるほど A には古風で詩的な語彙が含まれており詩的連想に於いて B を遙かに凌いでいる。しかしそれはバラッドの本質的なものではなく、むしろバラッドにとっては、平凡な常套語句の方がより機能的であったのである⁽³¹⁾ こういったバラッドというジャンルの特異性を踏まえない批判は語彙についてのみではない。それはしばしば引用される次の箇所に対する批判に於いても表われている。

54. For Wetharryngton my harte was wo
That euer he slayne shulde be;
For when both his leggis wear hewyne in t[w]o
Yet he knyled and fought on hys kny.

50. For Witherington needs must I wayle
As one in dolefull dumpes,
For when his leggs were smitten of,
He fought vpon his stumpes.

批評家達は B が現実離れした誇張表現になっている点をその批判の論拠にしているが⁽³²⁾ こういった誇張法 (hyperbole) はバラッド特有の、アクションをより生々と描く為のレトリックであり、B を批判する論拠にはならないのである。結局、B への批判が集中するのは、それだけ A が詩的芸術性を獲得してただ単なるバラッドとして留まっていない為に、B にもそういった高度な水準を要求する傾向があるからであろう。

注

(1) 現在出版されているバラッドの選集の多くが *Chevy Chase* というタイトルを採用している。例えば、

The Oxford Book of Ballads (1969)

The Penguin Book of Ballads (1975)

The Viking Book of Folk Ballads of the English-Speaking World (1956)

等はそうである。以下、本論でも *Chevy Chase* と呼ぶことにする。

(2) よく知られた歴史的事件を扱ったバラッドで、この他に、*Chevy Chase* と同様に1388年の「オクバーンの戦い」を扱った *The Battle of Otterburn* (161) が有名。Child の分類番号156番から168番までのバラッドがこれに当る。(Hodgart, M. J. C., *The Ballads*, Norton, 1962, p. 16.)

(3) 『詩の弁護』(*Defence of Poesie*, 1595) の中に見られる言葉。

“Certainly I must confesse mine owne barbarousnesse, I never heard the old Song of *Percy* and *Duglas*, that I founde not my heart mooved more then with a Trumpet; and yet is it sung but by some blinde Crowder, with no rougher voyce, then rude stile: which being so evill apparelled in the dust and Cobwebbes of that uncivill age, what would it worke, trimmed in

- the gorgeous eloquence of 'Pindare?' (*The Prose Works of Sir Philip Sidney*, Cambridge Univ. Press, 1968, vol. III, p. 24.)
- (4) "A ballad which stirred the soul of Sidney and caused Ben Jonson to wish that he had been the author of it rather than of all his own works cannot but be dear to all readers of taste and feeling." (Wheatley, B., (ed.), *Reliques of Ancient English Poetry*, Dover, 1966, vol. I, pp. 21-2.)
- (5) 彼は第70号に於いて *Chevy Chase* を "the favourite Ballad of the common people of England" として広く世に紹介し、第74号ではローマの詩人 Virgil の *Aeneid* との比較を試みている。
- (6) Wheatley, *op. cit.*, p. 249.
- (7) Child, F. J., (ed.), *The English and Scottish Popular Ballads*, Dover, 1965, vol. III, p. 305. 以下 *ESPB* と略記。
- (8) *op. cit.*, p. 27.
- (9) *The Ballad of Tradition*, Oxford Univ. Press, 1957, pp. 100-1.
- (10) ここでの連番号は A の番号である。
- (11) *op. cit.*, p. 31.
- (12) Child 教授は主な commonplace を約40種類 *ESPB* の第5巻 (pp. 474-5.) にリストアップしている。
- (13) "only fourteen ballads in all have survived in manuscripts or printed texts dating from before 1600." (Hodgart, *op. cit.*, p. 72)
- (14) A の含まれている写本は Bodleian Library の Ashmole 48 (1557~1565年) で "Richard Sheale" という署名がある。Thomas Percy は, "The style of this and the following ballad is uncommonly rugged and uncouth, owing to their being writ in the very coarsest and broadest northern dialect." と A の英語を評している (*op. cit.*, p. 35)。また Skeat は *Specimens of English Literature, 1394~1579* の中でこの写本について, "The MS. is a mere scribble, and the spelling very unsatisfactory." と述べて綴字の不完全さに言及している (*ESPB* p. 314)。尚, MS. Ashmole 48 については D. C. Fowler が *A literary history of the popular ballad* (Duke Univ. Press, 1968, pp. 96-108.) で詳しく論じている。
- (15) テキストは綴字, 句読点等を考慮して, A は *The Oxford Book of Ballads* (Kinsley, J., (ed.) Oxford Univ. Press, 1969), B は *The Viking Book of Folk Ballads of the English-Speaking World* (Friedman, A. B., (ed.), The Viking Press, 1956) を用いた。
- (16) 注の(14)を参照。
- (17) この箇所は *OED* の第6例。
- (18) 名詞と形容詞を結合させた複合形容詞で Homer がよく用いたとされている。
- (19) *OED sb.* 1. b.
- (20) 「頭韻は古期, 中期の英詩の特徴であったが, Chaucer がその *Canterbury Tales* に脚韻 (end rhyme) を用いて以来, 頭韻はこれにとって代わられて単に装飾的なものになった。」(『現代英語学辞典』東京, 成美堂, 1973)
- (21) *OED* 'Wough', *sb.*² 2. a.
- (22) *OED*
- (23) *OED* 'Sprent', *v.* 1. b.
- (24) *OED* 'Beet', *v.* 1. 3. c.
- (25) *Chevy Chase* は, 元々, 写本の中では長い二行連句 (couplet) 形式で書かれていたが, Child 教授はより一般的な四行連句 (quatrain) に書き直している (Fowler, *op. cit.*, p. 97.)。Gerould は「二行連句が最も一般的な詩形であり, Child バラッド305編のうち, 179編が二行連句で書かれている」と指摘している (*op. cit.*, p. 126.)。
- (26) 「問答形式」はバラッドの語り口の一つであり, その場合, 「答え」は「問い」の syntax を利用することが多い。

Its whether *will ye be a rank robber's wife,*
Or *will ye die by my wee pen knife?*
Its *I'll not be a rank robber's wife,*
But *I'll rather die by your wee pen knife.*

(Child 14A, 4-5)

(27) *op. cit.* pp. 115-6.

(28) *op. cit.* p. 22.

(29) Reed, J., *The Border Ballads*, The Athlone Press, 1973, p. 125.

(30) Bold, A., *The Ballad*, Methuen, 1979, p. 35.

(31) 本論の I を参照。

(32) 例えば Percy は次のように述べている。

“Thus, for instance, the catastrophe of the gallant Witherrington is in the modern copy exprest in terms which never fail at present to excite ridicule; whereas in the original it is related with a plain and pathetic simplicity, that is liable to no such unlucky effect:”
(*op. cit.*, p. 249)

